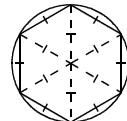


解 答

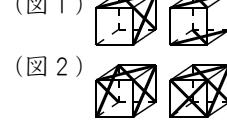
- | | | |
|---------------------|------------|----------------------|
| ① (1) 3 | (2) 2 | (3) 4 |
| ② (1) 35度 | (2) 時速40km | (3) 54人 |
| (6) $D < A < B < C$ | | (4) 解説参照 |
| (7) ① 14分 | ② 1800m | (5) 10通り |
| ③ (1) 96 | (2) 84 | (3) 90 |
| ④ (1) 4 | (2) 12 | (3) $D < F < E < C$ |
| ⑤ (1) 【A群】 | (2) 501 | (3) 6, 9, 11, 14, 16 |

解 説

② (4) 1辺が1の正六角形は円の中にぴったりとかきこむことができ、この正六角形のまわりの長さは6です。したがって、円周の長さは6より長いですから、直径の2でわると、円周率が3より大きいことがわかります。

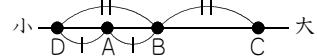


(5) ○と●の個数で場合分けをします。 $(\bigcirc, \bullet) = (0\text{個}, 6\text{個}) (6\text{個}, 0\text{個}) (1\text{個}, 5\text{個}) (5\text{個}, 1\text{個})$ の場合は、それぞれ1通りずつ、 $(\bigcirc, \bullet) = (2\text{個}, 4\text{個}) (4\text{個}, 2\text{個})$ の場合は、(図1)のようなそれぞれ2通りずつあります。 $(\bigcirc, \bullet) = (3\text{個}, 3\text{個})$ の場合は(図2)のような2通りあります。したがって、全部で、



$1 \times 4 + 2 \times 3 = 10$ (通り)

(6) $A + B < C + D \cdots ①, 2 \times A = B + D \cdots ②, 2 \times B = C + D \cdots ③$ とおきます。 $(① \times 2)$ 式 $\rightarrow A + A + B + B < C + C + D + D$ と $(② + ③)$ 式 $\rightarrow A + A + B + B = B + C + D + D$ を比べると、 $B < C$ とわかります。また、②からBとDの平均がA、③からCとDの平均がBとわかりますから、4つの数A, B, C, Dには右のような関係があると考えられます。



(7) ① グラフから、0~6分は2人が歩いていて、6~16分はどちらか1人が歩いています。 $(1080 - 600) \div (16 - 6) = (\text{毎分}) 48(\text{m})$ 、16~20分は2人とも休憩していて、20~25分は2人が歩いています。 $600 \div (25 - 20) = (\text{毎分}) 120(\text{m})$ より、Aの速さは毎分 $(120 - 48) = 72\text{m}$ 、Bの速さは毎分48mとなるので、Aの休憩時間は $(20 - 6) = 14$ 分です。

② 0~6分の間に2人で進んだ距離は、 $120 \times 6 = 720(\text{m})$ 。したがって、出発前の2人の間の距離は、 $1080 + 720 = 1800(\text{m})$

③ (1) $6 \times 6 \times 3.14 \times 8 \times \frac{1}{3} = 96 \times 3.14(\text{cm}^3)$

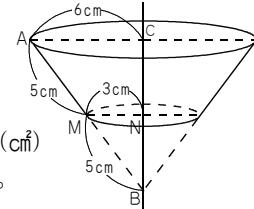
(2) 右の図より、円すい台となります。 $96 \times 3.14 \times \frac{7}{8} = 84 \times 3.14(\text{cm}^3)$

(3) $6 \times 6 \times 3.14 + 3 \times 3 \times 3.14 + (10 \times 6 - 5 \times 3) \times 3.14 = 90 \times 3.14(\text{cm}^3)$

④ (2) $128 = 2 \times 2 \times 2 \times 2 \times 2 \times 2 \times 2$ より、 $\underbrace{2 \times \dots \times 2}_{84\text{個}} = \underbrace{2 \times \dots \times 2}_{7\text{個}} \times \underbrace{2 \times \dots \times 2}_{7\text{個}} \times \underbrace{\dots \times 2}_{7\text{個}}$ 。

$84 \div 7 = 12$

(3) かける回数を、84, 48, 36, 24の最大公約数12にそろえて大小を比べます。 $C \rightarrow 2$ を84回かける= 128 を12回かける、 $D \rightarrow 3$ を48回かける= $81 (= 3 \times 3 \times 3 \times 3)$ を12回かける、 $E \rightarrow 5$ を36回かける= $125 (= 5 \times 5 \times 5)$ を12回かける、 $F \rightarrow 11$ を24回かける= $121 (= 11 \times 11)$ を12回かける、となるので、 $D < F < E < C$ となります。



⑤ (1) 25個で1周期と考えます。 $101 \div 25 = 4$ あまり1より、5周期目の1個目ですから、【A群】です。

(2) 【A群】は5個で1周期と考えると、各周期の先頭は加える数が25の等差数列となっています。 $101 \div 5 = 20$ あまり1より、21周期目の先頭ですから、 $1 + 25 \times (21 - 1) = 501$

(3) 25個の周期の先頭を□, n番目とするとき、右の表のように考えることができます。 $(n+3)$ 番目までの和は、次のような連続した5つの整数になります。【A群】 $\cdots \square \times 4 + 39$, 【B群】 $\cdots \square \times 4 + 38$, 【C群】 $\cdots \square \times 4 + 37$, 【D群】 $\cdots \square \times 4 + 36$, 【E群】 $\cdots \square \times 4 + 40$ 。また、 $(n+4)$ 番目までの和は、すべての群で $(\square \times 5 + 60)$ となりますから、5つの群の和は次の周期の先頭で、再び連続する5つの整数になります。したがって、各周期の中で、n番目と $(n+3)$ 番目が条件を満たしますから、N=4よりも大きい{6, 9, 11, 14, 16}とわかります。

N番目	n	n+1	n+2	n+3	n+4
【A群】	□	□+9	□+13	□+17	□+21
【B群】	□+1	□+5	□+14	□+18	□+22
【C群】	□+2	□+6	□+10	□+19	□+23
【D群】	□+3	□+7	□+11	□+15	□+24
【E群】	□+4	□+8	□+12	□+16	□+20